

# 日本泌尿器科学会甲信越合同学術大会

(第 207 回信州地方会・第 113 回山梨地方会・第 405 回新潟地方会)

## 《 プログラム・抄録 》

日 時：2023 年 6 月 10 日（土） 14:00～17:05

会 場：長岡グランドホテル 2 階『悠久の間』

新潟県長岡市東坂之上町 1 丁目 2-1

TEL 0258-33-2111

参加費：3,000 円

- ※ 参加受付：12 時 45 分～
- ※ PC 受付：13 時 00 分～13 時 40 分まで。
- ※ 口演時間：発表 7 分、討論 3 分（時間厳守でお願いします。）
- ※ 奨励賞（各地方会会員）は卒後 10 年目までの発表者が対象となります。選考資格者は全演題を聴取した方に限られます。投票用紙は受付にてお渡しします。

日本泌尿器科学会会員証を必ずご持参下さい。

〒951-8510 新潟市中央区旭町通 1-757

新潟大学大学院腎泌尿器病態学分野(泌尿器科学教室)内

日本泌尿器科学会新潟地方会

TEL：025（227）2289／FAX：025（227）0784

会長 富田 善彦

14:00~14:05

開会の辞

日本泌尿器科学会新潟地方会会長

富田 善彦

14:05~15:05

座長 石崎 文雄 (新潟大学)

【奨励賞候補演題・新潟】

1. 腎細胞癌の臍転移に対して手術加療した4例

長岡赤十字病院 泌尿器科<sup>1)</sup>、消化器外科<sup>2)</sup>、病理診断部<sup>3)</sup>

西山紘貴<sup>1)</sup>、山口峻介<sup>1)</sup>、鈴木一也<sup>1)</sup>、米山健志<sup>1)</sup>、皆川昌広<sup>2)</sup>、薄田浩幸<sup>3)</sup>

腎細胞癌の臍転移に対する治療は、手術侵襲の大きさや術後のインスリン導入の必要性、各種薬物療法の広がりもあり、外科的切除に関しては議論もある。当科において2014年から2022年の8年間に4例の腎細胞癌臍転移切除症例を経験した。初回臍転移切除時の年齢は61から74歳で、原発巣切除から初回臍転移切除までの期間は10から18年だった。原発巣転移巣とも病理はすべてclear cell carcinomaだった。4例すべての症例が現在まで生存中である。腎細胞癌の臍転移は、転移巣の積極的切除により予後延長が期待できると考えられる。

【奨励賞候補演題・山梨】

2. 当院で経験した尿膜管癌手術症例5例の検討

山梨大学大学院総合研究部 泌尿器科学講座

向垣内樹、上野優拓、中西嘉浩、武藤竜也、須田遼祐、志村寛史、望月孝規、吉良聡、澤田智史、三井貴彦

【目的】当院で尿膜管癌の手術を施行した症例を供覧し、尿膜管癌治療の実態を把握する。

【方法】当院で尿膜管癌の手術を施行した5症例を後方視的に検討した。

【結果】性別は男性3例女性2例、平均年齢は51.8歳であった。術後6か月以内に再発した症例は4例であった。

【考察】今回検討した5症例は診断時sheldon分類でⅢAとなっていた。このように診断時点で深達度が高いことが尿膜管癌の予後の悪さの要因と考えられる。

【奨励賞候補演題・信州】

3. ペンブロリズマブによる免疫関連有害事象の検討

信州大学

上菌拓、上野学、井上貴浩、塩崎政史、小川典之、原寛彰、齊藤徹一、皆川倫範、小川輝之

免疫チェックポイント阻害薬(ICI)の特有の有害事象である免疫関連有害事象(irAE)は全身のあらゆる臓器に重篤な症状をもたらすことが知られているが、リスク因子についてはいまだに詳細は明らかでない。本稿では、2018年1月から2023年4月までに当院でペンブロリズマブを投与された59例を対象にして、irAE発現群と非発現群に分類し、両群間の社会歴、既往歴、内服薬、バイオマーカーなどを比較、検討した。

【奨励賞候補演題・山梨】

4. 当院における転移性ホルモン感受性前立腺癌に対する upfront 治療の検討

山梨大学大学院総合研究部 泌尿器科学講座

上野優拓、向垣内樹、中西嘉浩、武藤竜也、須田遼祐、志村寛史、望月孝規、吉良聡、澤田智史、三井貴彦

【緒言】転移性ホルモン感受性前立腺癌(mHSPC)に対する upfront 治療の症例経過を報告する。

【対象患者と方法】2021年4月から2023年4月までに経験した症例について後ろ向き解析を行った。

【背景】対象患者は30例で、Gleason scoreは8以上、iPSAの中央値は257ng/mLであった。治療開始後のPSA nadir中央値は0.045ng/mLであり、初回CT評価ではPR19例、SD3例、未施行8例であった。有害事象として、apalutamide14例で皮疹が出現した。

【考察】upfront治療はmHSPCに対し有効な治療効果があり今後も積極的に導入を考慮すべきである。

【奨励賞候補演題・信州】

5. 内腸骨静脈グラフトを用いて血行再建を行った生体腎移植の一例

信州大学

紺谷秀憲、皆川倫範、井上貴浩、原寛彰、齊藤徹一、上野学、小川輝之

今回我々は血液型不一致生体腎移植において内腸骨静脈グラフトを用いて血行再建を行った1例を経験した。症例は43歳女性、IgA腎症を原疾患とする末期腎不全に対して母をドナーとした血液型不一致生体腎移植を施行した。ハンドアシスト後腹膜鏡下にドナーの右腎を摘出し、レシピエントの右腸骨窩に移植した。腎静脈の短さを補うため、移植腎の頭尾側を逆転したうえ、内腸骨静脈グラフトを用いて血行再建を行った。

【奨励賞候補演題・新潟】

6. 自己免疫性GFAPアストロサイトパチーにより髄膜炎尿閉症候群を来した1例

新潟県立中央病院 泌尿器科<sup>1)</sup>、脳神経内科<sup>2)</sup>、総合診療科<sup>3)</sup>

有波健太郎<sup>1)</sup>、片桐明善<sup>1)</sup>、水澤隆樹<sup>1)</sup>、渡邊和博<sup>1)</sup>、佐波達朗<sup>1)</sup>、手塚敏之<sup>2)</sup>、丹野侑斗<sup>3)</sup>

症例は60歳男性。発熱、尿閉で当院総合診療科を紹介受診した。髄液検査で単球細胞数増多を認め、髄膜炎尿閉症候群(meningitis retension syndrome; MRS)疑いで神経内科に入院した。入院後呼吸困難となり挿管、ICU管理とした。同日よりステロイドパルスを施行した所、熱型・呼吸状態の改善を認め、ICU入院後3日で抜管した。フォーレ抜去で自尿確認でき、入院後45日で自宅退院した。その後、髄液抗GFAP $\alpha$ 抗体陽性が判明し自己免疫性GFAPアストロサイトパチーと診断された。髄膜炎・脳炎に伴う尿閉について若干の文献的考察を加え報告する。

《 休 憩 15:05~15:15 》

15:15~16:05

座長 相川 純輝 (山梨大学)

【奨励賞候補演題・山梨】

7. 当院における80歳以上で診断した上部尿路上皮癌に対する治療選択の検討

山梨大学大学院総合研究部 泌尿器科学講座

大塚礼嗣、相川純輝、長田拓也、花輪和司、楠田麻友子、葛西義史、大竹裕子、澤田智史、三井貴彦

本邦において高齢者人口はますます増加しており、80歳以上の上部尿路上皮癌患者はさらに増加すると予想される。2013年1月1日から2023年3月31日までに当院で上部尿路上皮癌と診断した80歳以上の64症例を対象とし後方視点的に検討した。対象患者の年齢は80-95歳(中央値86歳)で、男性が46例、女性が18例であった。初回治療の内訳は外科治療38例、BCG療法2例、化学治療5例、放射線治療7例、BSC12例であった。当院における治療成績かつ治療選択について文献を踏まえ報告する。

【奨励賞候補演題・信州】

8. 右腎臓原発のEwing肉腫の一例

信州大学

杉山侑、齊藤徹一、井上貴浩、塩崎政史、皆川倫範、小川輝之

症例は17歳男性。右側腹部痛の精査目的に施行されたCT検査にて、右腎に17cm大の腫瘤を認め当科紹介となった。MRI検査では肝臓・下大静脈への浸潤を否定できず、経皮的腎生検を施行し、Ewing肉腫と診断された。VDC-IE療法を4コース施行し、腫瘍の縮小を認めたため右腎摘除術を行った。右副腎・横隔膜へ浸潤を認めたため合併切除を要した。Ewing肉腫は泌尿器科領域での報告は少ないため文献的考察を加え報告する。

【奨励賞候補演題・新潟】

9. Nivolumab+Ipilimumab 療法後の転移巣増大後に Cabozantinib 療法が著効した再発転移腎細胞癌の 1 例

新潟大学地域医療教育センター 魚沼基幹病院 泌尿器科<sup>1)</sup>、病理診断科<sup>2)</sup>、放射線診断科<sup>3)</sup>  
石田恭平<sup>1)</sup>、長谷川剛<sup>2)</sup>、池田洋平<sup>3)</sup>、原昇<sup>1)</sup>、西山勉<sup>1)</sup>

50 歳代の女性が 2016 年 10 月に腹腔鏡下右腎摘除術を受け、病理学的には Clear cell renal cell carcinoma, p T3a であった。2022 年 4 月に腹壁、骨盤内リンパ節再発を認め、同時の高度の貧血も認めた。再発腫瘍の生検結果は腎摘除術時の病理と同様であった。IMDC は Intermediate risk であった。年齢等を考慮し、2022 年 5 月から Nivolumab+Ipilimumab 療法を開始した。治療開始後も貧血の亢進を認め適宜輸血を繰り返した。CT 上転移腫瘍の軽度増大を認め、同 9 月に高度の消化管内出血を認め、Nivolumab を 8 回投与で中止した。その直後から Cabozantinib 40mg 投与を開始した。その後転移腫瘍の著しい縮小を認めたが、高度の下痢が継続したため Cabozantinib 20mg に減量して継続している。2023 年 4 月現在腫瘍縮小を維持している。

【奨励賞候補演題・山梨】

10. 当院における AYA 世代の精巣腫瘍の治療成績の検討

山梨大学大学院総合研究部 泌尿器科学講座  
長田拓也、相川純輝、大塚礼嗣、楠田麻友子、花輪和司、葛西義史、大竹裕子、澤田智史、三井貴彦

精巣腫瘍は AYA 世代に好発する悪性腫瘍であり、治療選択が予後に直結するため慎重な治療選択が必要である。当院で 2013 年 4 月 1 日から 2023 年 3 月 31 日までに当院で治療した 15 歳から 39 歳までの精巣腫瘍症例 16 例について治療成績を後方視点的に検討し報告する。

【奨励賞候補演題・信州】

11. 腎門部に発生したレニンノーマ（傍糸球体細胞腫）に対して腎部分切除術を行った一例

長野市民病院  
井世奈、山本哲平、小柴将史、萩本貴士、羽場知己、飯島和芳、加藤晴朗

27 歳、女性。X 年 7 月高血圧症を指摘され降圧薬を開始。X+1 年 6 月妊娠の際に、高レニン血症を指摘された。CT で右腎門部に約 15mm 大の結節を指摘、レニンノーマ（傍糸球体細胞腫）と診断された。レニンノーマはレニン産生により二次性高血圧を呈する良性腫瘍である。X+2 年 11 月腎部分切除術を行い、低 K 血症および高血圧症に対する内服治療は不要となり、腎機能の温存に成功した。

《 休 憩 16:05~16:15 》

16:15~17:05

座長 小川 典之（信州大学）

【奨励賞候補演題・山梨】

12. 当院における前立腺肥大症に対する WAVE の初期経験

富士吉田市立病院 泌尿器科  
廣瀬敬一郎、梶村光貴、高橋宣弘、今井佑樹、武田正之

（目的）経尿道的水蒸気治療（water vapor energy therapy: WAVE）は前立腺肥大部分を水蒸気による熱変性で縮小させ排尿状態を改善させる治療である。当院における WAVE の治療成績について報告する。

（対象と方法）2023 年 1 月より当院において WAVE を行った 7 症例を対象とした。術前、術後 1 ヶ月後、2 ヶ月後の IPSS、QOL スコア、前立腺容積、残尿量、最大尿流率により治療効果を評価した。

（結果）術前、術後 1 ヶ月後、2 ヶ月後の平均 IPSS は 14.4, 8.8, 5.8 で、QOL スコアは 3.7, 1.8, 1.3 であり、残尿量は 111.1ml, 64.0ml, 42.3ml であり改善がみられた。前立腺容積と最大尿流率は大きな改善はみられなかった。

（結論）WAVE の短期的な治療成績は良好であった。

【奨励賞候補演題・信州】

13. アミノレブリン酸塩酸塩併用 TUR-BT における周術期副作用についての検討

JA 長野厚生連 北信総合病院、岡谷市民病院<sup>2)</sup>  
鈴木智敬<sup>1)</sup>、尾沼 弘<sup>1)</sup>、平形志朗<sup>2)</sup>、杵渕芳明<sup>1)</sup>

【緒言】アミノレブリン酸塩酸塩を併用した TUR-BT では低血圧や嘔気・嘔吐症状を経験する頻度が高い。当院における周術期副作用について文献的考察を加え、検討する。【対象】2017年9月以降アミノレブリン酸塩酸塩内服にて手術施行もしくは中止となった204例【結果】周術期副作用:低血圧63例(30.9%)、嘔気62例(30.3%)、SpO<sub>2</sub>低下10例(4.9%)、肝機能障害4例、一過性脳虚血発作1例【結語】アミノレブリン酸塩酸塩併用時、様々な副作用に注意が必要である。

【奨励賞候補演題・山梨】

14. 当科で膀胱腔瘻に対して膀胱腔瘻閉鎖術を施行した3例

山梨大学大学院総合研究部 泌尿器科学講座  
花輪和司、澤田智史、大塚礼嗣、長田拓也、楠田麻友子、葛西義史、相川純輝、大竹裕子、志村寛史、望月孝規、吉良聡、三井貴彦

膀胱腔瘻は手術や悪性腫瘍、放射線照射によって生じる女性泌尿生殖器瘻の一種で、治療は手術療法が推奨される。我々は2013年から2023年の間に3例経験しており、それぞれ年齢は53-85歳。原因は2例で子宮全摘除術、1例で腎尿管全摘除術であった。失禁発現から手術までの期間は3-9ヶ月で、2例で経腔膀胱腔瘻閉鎖術、1例で経腹膀胱腔瘻閉鎖術を行い、全例で尿失禁は消失した。若干の文献的考察を交えて報告する。

15. 肛門周囲膿瘍で診断された尿道遺物の1例

新潟大学大学院 医歯学総合研究科 腎泌尿器病態学分野  
星野さや香、小原健司、山名一寿、石崎文雄、村田雅樹、星井達彦、富田善彦

症例は14歳、脳梁欠損症の男児。肛門の右腹側の発赤腫脹を主訴に当院小児外科を紹介初診した。CTにて陰茎から右側殿裂皮下の腫瘤に連続する、線状の高濃度構造を認めた。MRIでも腫瘤から尿道球部にT1/T2低信号の線状構造を認めた。尿道遺物とそれに伴う肛門周囲膿瘍の診断で当科入院した。術前の病歴聴取にて、14ヵ月前にほうきの穂を尿道に挿入したことを認めた。内視鏡的に摘出した後、抗菌療法にて改善した。

16. 長野市民病院での密封小線源永久挿入治療

長野市民病院  
飯島和芳、小柴将史、井世奈、萩本貴士、羽場知己、山本哲平、加藤晴朗

当院では限局性前立腺癌に対し、2004年よりヨウ素125シード線源を用いた低線量率密封小線源永久挿入治療(LDR)を開始し、2023年4月末までに1470名に治療を行った。NCCNリスク分類でのFavorable intermediate risk 群まではLDR単独治療(2008年4月まで145Gy、以降は160Gy)、Unfavorable intermediate risk 群は外照射(46Gy/23fr)併用LDR(100Gy)治療を行い、High risk 群はLDR適応外(高線量率密封小線源治療を中心としたTrimodalityを提案)としてきた。中間リスク群に関する当院を含む多施設での報告が2022年になされ、これに伴い治療方針の変更を行ったので、変更点をご提示したい。

合同学術大会終了後、共催セミナー並びに会員懇親会が予定されています。